

組織論で読み解く 江戸時代(3)

著者	遠田 雄志, 小川 格
出版者	法政大学経営学会
雑誌名	経営志林
巻	47
号	2
ページ	61-73
発行年	2010-07-31
URL	http://doi.org/10.15002/00008914

〔研究ノート〕

組織論で読み解く

江戸時代 (3)

遠田雄志 / 小川 格*

- 目次
- はじめに
- I. 組織としての江戸時代
1. 組織の常識
- 1.1 鎖国
- 1.2 米本位制
- 1.3 参勤交代
- 1.4 世襲と身分制度 (以上第46巻4号)
2. 成長ゆえの衰退
- 2.1 武士が武器を独占した社会
- 2.2 幕府を支えた譜代家臣団
- 2.3 徳川幕府の金、物、人
- 2.4 譜代筆頭井伊家の誇りと挫折 (以上第47巻1号)
3. 変化の気づきと互解
- 3.1 海外事情
- 3.2 田沼意次
- 3.3 蘭学者たち (以上本号)
4. 常識の更新
- II. 江戸時代の春夏秋冬
1. 革新局面前期＝動乱期後期〔春〕
2. 革新局面後期〔夏〕
3. 保守局面前期〔秋〕
4. 保守局面後期＝動乱期前期〔冬〕
- III. 江戸時代の意味するもの
- おわりに

3. 変化の気づきと互解

最近、クルマに対する社会やユーザーの目が厳しくなっている。自動車会社は、こうした環境の大きな変化に対応して各メーカーの常識を

公害や資源それに安全にいつそう配慮したものに变えていかなければならない。トヨタはこうしたことにはいち早く気づき、やがて世界の自動車メーカーとなった。その秘密はなにか？

これは、組織の適応という問題である。組織の適応モデルは正にこの適応のメカニズムを明らかにしようとしたものである。本稿では、そのうちのとくに、環境変化の気づきとそれにもなって生まれる反常識的な思考や行動について論じてみよう。

そもそも常識とは、組織が現在かかっている環境に対応して形成され、保持されているものである。したがって、環境が大きく変わった場合、それにもない常識も変わっていかなければならない。

ここで、「組織のかかわる環境」という言葉に注意してほしい。組織がその中で生きていく環境は、他から与えられたものではなく、自らが世界あるいは状況と能動的にかかわって選択し、創造していくものである。「組織のかかわる環境」という言葉は、組織のそうした主体性を強調したものである。要するに、同一の状況にも組織の数だけ多数の環境がありうるのである。そのため、たとえば次のように言うことができる。長期にわたる乾季という同じ自然状況において、自らの環境を植物のみを食べるとするいわゆる草食動物は雑食動物にくらべ生存しにくい。

鎖国や身分制を常識とした江戸時代のかかわる環境は、きわめて閉鎖的で静態的なものであった。とはいえ、長きにわたる平和で安定した社会

*編集事務所南風舎代表

は、そうした環境でこそ実現しえたのである。しかし、その環境は次第に変わっていき、ついに江戸時代も終り明治維新を迎えるのである。

それはともかく、組織はどのようにして今かかわっている環境の変化に気づき、常識とそれに対する環境を更新するのか。

組織はこれまでの常識にしたがって様々な事柄を処理したり、計画を立てて実行に移す。するとある結果が出る。それが常識の範囲を超えた、いわゆる“想定外”の結果であったとする。しかも一度ならず、何回も想定外の結果が出てくる。あるいは、似たような考え方や仕事のやり方をしている組織が予期せぬ事態に陥ったことをあちこちで見たり聞いたりした組織は「もしかしたら環境が変わりつつある」とか「変わったんじゃないか」と不安を感じる。さらに、意外な情報に一度ならず何度も接していると、人はこれまでの見方や考え方でよいのかと不安を感じるようになる。こうした想定外の事柄や意外な情報のもたらす不安が環境変化の気づきである。

しかしこの環境の変化は組織全体で気づくわけではない。多くの場合、一部の人のみが不安を感じ変化に気づく。企業であれば環境に直接接している営業マンとか経営責任を自覚している社長といった一部の人が不安を感じる。

そうした変化に気づいた人たちはやがてこれまでの常識に目を向けるようになる。そして、例えば「どうやらわが社の仕事のやり方は時代に合わなくなっているようなので、もう少し若い人の考えを取り入れるべきだ」と考え始めたりする。

このように組織の皆が信じてきた常識とは違う物の見方、行動の仕方が、そうした敏感な人たちによって組織の一部で形成され、広がる。とはいえ、それは常識のような組織全体で共有されているものではない。あくまでも一部の仲間内で相互に共有された理解である。私はこれを“常識 (common sense)” に対して相互理解略して“互解 (mutual sense)” と呼ぶ。あるいはカルチャーに対するサブカルチャー、“中心” に対する“周縁” と考えてもよい。例えば日本では長年にわたって、終身雇用、年功序列人事が企

業の常識であった。しかし、外資系企業やベンチャーを中心に能力給や成果主義といった互解が生まれている。

組織の今かかわっている環境が変質して常識に合わなくなってくると、そうした互解が、ますます形成され広がっていく。この互解がだんだん力を得てくると、これまで皆が依拠していた常識の信頼性が徐々に失われていきそれが底をついたときに常識は変更を余儀なくされる。やがて、常識を新たにした組織は自らのかかわる環境を一新し、組織自身を再生するのである。

それでは、江戸時代の組織としてかかわっていた環境がどのように変わっていったのか、その変化をどのような人がどのように気づき、どのような互解が形成され、広がっていったのかについて、少しばかり述べてみよう。

3.1 海外事情

「風説書」

日本が徳川幕府のもと、260年という長い泰平の世を謳歌している間、日本をとりまく世界は史上まれにみる大きな変化を遂げていた。海上の主役がスペイン、ポルトガルからオランダへ、さらにイギリスへと交代が進んでいったのである。日本は鎖国政策のもとオランダを唯一の窓として世界を見ていたから、この大きな変化とその意味をなかなか理解できなかった。

確かに幕府はオランダから毎年「風説書」(ふうせつがき)の提出を要求し、それにより世界情勢を把握しようとしていた。しかし、情報はオランダに都合よく脚色されていたし、幕府首脳部に独占されていた。その上、そうした情報を受け取った幕府は自分の都合に合わせて解釈するだけだった。幕府には世界の大きな状況の変化を捉え、それに対処する意志も実行力もなかったのである。

要するに、この段階では、状況は変わっていたのに(主体的に選択し創造している)環境は変わっていないのである[状況と環境のこの言葉づかいに注意してほしい]。

イギリス東インド会社

この時代、もっとも注目しなければならない

海外事情の変化がイギリスの台頭である。そのイギリスのアジア進出の中核を担ったのがイギリス東インド会社である。興味深いことにこの会社は設立されたのが1600年、閉鎖したのが1858年と徳川幕府と歩調をあわせるかのように、ほぼ同時代に誕生し、終焉を迎えているのである。その一致は決して偶然とは思えない。

アジアでは17世紀の100年間オランダが支配権を握っていたからイギリスは徐々にインドの沿岸に拠点を築き、香料の輸入からその活動を始めていた。しかし、次第に木綿の輸入が増加し、やがて木綿が主役となる。羊毛を中心に生活していたイギリスの市民がこの時代にはじめて木綿の快適さを知り、ヨーロッパ中に急速に木綿が普及した。そのためインドでは木綿産業が発展した。しかし、18世紀に入るとイギリスでは茶を飲む習慣が普及していき、茶の輸入量が激増した。また、アジアの制海権がオランダからイギリスへと移った。

17世紀には、イギリスのアジアへの関心は、豊かなアジアの物産を輸入することであった。その彼らが求めたものは香料から木綿そして茶へと変化していった。反対にこの時代ヨーロッパからアジアへ売るのはほとんどなかった。

産業革命

ところが、18世紀なかばになると状況が激変する。イギリスに産業革命が起こったからである。蒸気機関によって稼働する自動織機が完成し、インドからもたらされる安くて質のよい木綿と対抗できる木綿の大量生産が可能になった。工業生産された木綿はイギリスの需要を満たすのみならず、アジアへ大量に輸出され、ついにインドの手工業的な木綿産業をなぎ倒していった。このため、インドの平原は織物職人の白骨で真っ白になったといわれるほどの打撃を与えた。

田沼時代に進行していたイギリスの産業革命は、世界の政治経済の力関係を大きく変えていった。

これと歩調を合わせるようにイギリス東インド会社はインドの領土支配を進めていった。そのためには武力の行使も辞さなかった。そして

さらなる市場を求めて中国へと活動の場をのびていった。茶の輸入が増えすぎたため、インドでアヘン栽培を進め、それを中国に売り込んで、茶の決済にあてるといなりふりかまわぬ行動をとるようになった。こうして東インド会社は商社から急速に侵略と略奪の機関へと性格を変えていった。

中国に対するアヘンの売り込みをめぐる争いからアヘン戦争を仕掛け、武力に勝るイギリスは、不平等条約を押しつけ、ついに香港を手に入れてしまう。その行動はすでに会社の範囲を超えて侵略的な帝国主義国家そのものとなっていた。

七つの海を支配した大英帝国

1858年には、イギリス東インド会社はその役割を終え、国が直接インド支配にのりだした。1858年ムガル帝国を廃止し、1877年にはヴィクトリア女王を皇帝とするインド帝国が成立した。つまりインドはイギリスの植民地となってしまったのである。イギリス東インド会社は、大英帝国のアジア進出のつゆ払いをしたわけだ。時あたかも大英帝国はヴィクトリア女王のもと、七つの海を支配し、日の沈むことのない世界の覇者として君臨したのである。

鎖国日本に大きな脅威が迫っていたのである。

このように江戸時代を取り巻く世界の変化を見てゆくと、16世紀のポルトガルを中心とする時代と19世紀のイギリスを中心とする時代の二つの帝国主義の時代に挟まれた、偶然もたらされた穏やかな時代に、江戸時代は奇跡的に成立した社会だったことがわかる。江戸時代が本質的に状況変化に脆弱な環境とあえてかかわっていたことを思うと、その260年余という長さは、ことさら奇跡的である（パンダが何万年、何十万年生息してきたか知らないが…）。それはともかく、世界はこの260年の間に大きく変化をとげていたのであり、19世紀に入るとその影響はひたひたと日本の間近に迫っていたのである。

二人の先覚者

世界のこうした変化にいち早く気づき、警鐘

をならした男たちがいた。

工藤平助(くどうへいすけ)(1734~1801)と林子平(はやししへい)(1738~1793)である。

この頃、ロシアの東方拡大活動がさかんで、北海道のみならず日本近海に出没したり、イギリスの捕鯨船が日本近海に現れ、薪炭や野菜を要求するなどの事件が繰り返された。こうした状況に不安を感じた二人は警鐘をならし、海防の必要を説いた。しかし、二人の末路は大きく異なっていた。

工藤平助は、仙台藩の医師であったが、腕がたつと評判で江戸に屋敷をかまえ大層繁盛していた。このため全国から大名をはじめ各層の人士が集まり、工藤邸はつねににぎわっていた。蘭学者たちも多く、世界の情報も集まってきた。中には松前藩から裁判沙汰のために平助の助言を得ようと来る人もいた。平助はかれらとの交遊から松前の事情、蝦夷の交易の事情、ロシアの南下の事情等を知った。

ある時、工藤邸に来た幕府の用人が、田沼にとって名誉になるような話はないかと訊ねたのに対し、蝦夷地を開拓して国土を広げるとよいと答えると、その話をまとめて提出するようにとのお達しがあり、それに応えて上下二巻の『赤蝦夷風説考』(1781)を書いて田沼意次に献上した。

これを見た田沼は、ただちに北海道の調査を命じた。2艘の船を建造して調査隊を派遣し、北海道を西廻りと東廻りに探検し、カラフト、クナシリ、エトロフまで調査した結果、北海道内陸の開拓を進めることに決定した。

北海道の内陸部を開拓すれば、広大な耕地が期待できる。しかし、この開拓のためには約10万人の労働力が必要だと見積もられた。そこでまず、アイヌに農具を与え、耕作を教えることが考えられた。しかし、それだけではとても足りない。そこで、提案されたのが、穢多(えた)、非人といわれた人々である。穢多頭・弾左衛門配下の穢多、非人身分のもの7万人を移住させる計画が立案された。実に気宇壮大な計画である。

しかし、將軍家治(いえはる)の死去により田沼は失脚し、この計画は実行にうつされるこ

とはなかった。

一方、林子平は、江戸生まれであるが姉が仙台藩主の側室となった縁で仙台に移り住んだ。長崎をはじめ諸国を行脚し、その見聞から海防の必要を痛感し『海国兵談』(1787~1791)を著した。林はこの中で「西洋諸国は、他国の土地を奪って領土を拡張しており、その勢いは年年強まっている。早晚わが日本も標的になるに違いない。彼等はすぐれた航海技術により、どんな荒波も、物ともせず渡ってくる。わが国は四方を海に囲まれている。そして、江戸の日本橋から、ロシア・オランダまで、同一の水路であり、隔たりは全くない。」と海防の重要性を力説した。しかし、この本を出版する版元はなく、自ら版木を彫り出版したという。

ところが、このときの幕府は松平定信の時代であり、定信は「みだりに空論を唱え人心を惑わすもの」として出版をさしとめただけでなく、版木を没収し、子平は仙台の兄の家に蟄居という処分を受けた。

子平は「親もなし、妻なし子なし版木なし、金もなければ、死にたくもなし」とぼやいたというが、蟄居のまま56歳で没した。

3.2 田沼意次

田沼邸の座敷

『甲子夜話』(かつしやわ)という本がある。肥前平戸藩の元藩主松浦静山(まつうらせいざん)が書いた随筆である。江戸時代後期の世相がよく描かれている史料として頻りに引用される。この中に田沼意次(おきつぐ)の行状を描いた部分がいくつもあり、田沼意次を論ずるさいには必ずといっていいほど引用されてきた。

これによると、静山が20歳ごろのこと、田沼邸へご機嫌伺いに行ったことがある。静山は田沼邸の大勝手へ入っていったのだが、「この部屋は、30畳ほどの部屋であった。大抵の老中たちの座敷は一列に座っているのが通例であるが、田沼の座敷では両側に並んで、なお人があまるので、その後にもた幾筋か並んで、なおあまった人がその下の横に居並んで、そのうえ座敷の外側に幾人も列ぶという風である。」とその様子を描き「その時分の田沼の権勢というものは、

誠に思い半ばに過ぎる事である」としている。

この描写を根拠に、田沼は請託に基づいて政治を行う賄賂と汚職まみれの悪い政治家であったと描かれることが多かった。中には日本史上最悪の政治家と書いた人もいる。

しかし、大石慎三郎は『田沼意次の時代』(岩波書店1991年)を出版し、この中で静山がこれを書いたのは田沼の時代より35年以上もあとなので、その記憶は信用できないばかりでなく、静山は田沼の政敵である松平定信の縁戚にあたるため、その文章は歴史的にはまったく信用できず史料的な価値はないとぼつさり切り捨て、逆に田沼を清潔で大胆な政治家であるとする説を展開し、世の田沼観を一変させてしまったと評価するむきがある。

郡上踊り免許状

ところで、大石氏のこの本をあらためて読み直してみると、興味深いことに気がつく。一つは「郡上踊り免許状」をもらったとして、まえがきの中にその写真を掲げていることである。

大石は田沼研究の第一歩として郡上八幡藩で起こった一揆をとりあげ、関係する土地を見て回っているうちに4～5年の歳月がすぎってしまったと述懐している。郡上踊りというもの全国的に有名であるが、この囃子歌の一つに郡上一揆の一部始終をうたい込んだ「郡上義士伝」というものがある。農民達は一揆の歴史を歌の中に残し、語り継いだのである。

大石によれば、この一揆は藩主の金森頼錦(よりかね)が、苛酷な年貢の増徴をはかったことに端を発して起こったものだが、江戸時代を通じてきわめて特殊なものであった。第一に普通の一揆はせいぜい一ヶ月で終るのに、郡上一揆は足かけ5年にわたって戦い続けられた。また、普通、一揆は藩の内部で始末を付けるべきものであるのに、郡上一揆は幕府にもちこまれ評定所で処理されている。その結果、領主金森頼錦は領地没収、農民側は13名が獄門死罪ほか遠島など多数に及んだ。

しかし、ひときわ重大な事は幕閣の中から9名もの処分者を出し、中でも若年寄の本多忠央(ただなか)(遠州相良15,000石)が領地を没収さ

れ、その領地が田沼意次に与えられたことであった。これは、直接税増徴派幕閣を一気に追放するとともに、田沼意次をリーダーとする間接税派の登場の契機となった、とし、このため「郡上一揆」はまさに田沼時代の開幕をつげる事件ともいえると書いている。

大石は田沼時代の幕を開いた郡上一揆の調査のために現地入りし、4～5年の年月を費やして郡上踊りの免許状までもらったとその写真を掲げたわけだ。農村調査から江戸時代研究に入った大石らしい巧みな話の導入である。

このあと、田沼の政策を具体的に「流通税の導入」「通貨の一元化政策」「蝦夷地の調査とその開発計画」「印旛沼の干拓とその挫折」と描いてゆく。しかし、本書のユニークな点は、「賄賂を好み、賄賂によって政治を左右したという」田沼に関する悪評なるものは、どれも作られた悪評であるとしたうえで、さらに「田沼の悪事・悪評なるものを総まとめにして世間に周知させたのが、辻善之助氏の『田沼時代』という著名な著書である」(大石, 2001:p.38)として辻の著作を否定した事である。

大石は、田沼論を書くにあたって、76年も前の大正4年に書かれた辻善之助の著書を引っ張り出して、田沼悪人論の元凶として激しく批判し、自身の田沼善人論を高らかに謳い上げたのである。辻は、はたして本当に田沼を悪人として描いたのか。検証してみよう。

辻善之助の田沼観

辻善之助の1915年初版『田沼時代』は大きく前後に分かれており、前半は巷間云われている田沼とその時代に対する悪評の数々を江戸時代の史料に基づいて列記している。しかし後半では、この時代は新気運の潮流のみられた時代だと説き、たとえば、「第一は民意の伸張である。換言すれば民権発達とも言うべきものである。」として「百姓町人の騒動というものの如きも、一方からみれば民権の発達の一段階である。」(辻, 1980:p.256)とし、さらに「落首の多きこと、これは特にこの時代頃から著しいのであるが、そののんきで、楽天的で、人を馬鹿にしたさまは、官憲も何も

眼中にあったものではない。最も自由に時勢を諷し、政治を嘲り、不平の気を吐き文明を批評する、これもまた民権発達の一つの徴（きざし）と見ることが出来る。」（辻，1980:p.258）とし、「幕府の衰亡の始まりはこの時代に起こっているのである。」（辻，1980:p.259）としている。続いて、

「第二、因習主義の破壊 封建制度に付物の因襲主義は、この時代に破られた者が少なくない。」（辻，1980:p.261）とし御用達商人に帯刀を許したとか、格式にとらわれず手腕のある者を登用したなど多くの事例を紹介している。さらに、

「第三、思想の自由と学問芸術の発達……全体として思想界学問界がよほど自由になった」（辻，1980:p.264）として漢学、国学、俳諧、小説、絵画、音楽と実例をあげて紹介し、「この時代は、実に奇才の多く出た時であって何事にも風がわりのもが多い。すべて在来の型を脱して、旧きものを踏襲しない、何者か新しきものを出さずば止まぬという概があって、一般に活気に満ちて、生彩がある。文人でも画家でも何でもすべて精神に余裕のあるものが多い。」（辻，1980:p.280）と当時の風潮を描写した上で、

「この時代は江戸文化の極盛時代というべき文化・文政時代の前駆である。化政時代が江戸文化の満開であるならば、田沼時代はそのまさに綻びんとする蕾である。」（辻，1980:p.282）と大きな可能性を秘めた準備の時代であると高く評価している。

さらに、蘭学の発達したのもこの時代であり、玄白が『解体新書』をおそるおそる将軍と老中に奉ったが、何のおとがめもなく納めることができたのは、田沼の働きがあったからにちがいないと述べ、またさらに、

「田沼が開国思想を懐いていた事は、当時日本に来ておったチチング（オランダ商館長）の著した物に見えている。チチングの記す所によると幕府においては外人を自由に国内に入れてもいささかも国に損害がない事を知ったのみならず、それによって優秀なる科学芸術を学ぶの機会を得ることを知って国内を外人に開放しよう

とした」（辻，1980:p.288）と書いている。田沼はすでに開国の意向をもっていたというのである。事実、彼は蝦夷地の開発と同時にロシアとの交易も開こうと考えていた。そして最後に、「田沼時代は一面においては混沌濁乱の時代であるがまた他の一面においては新気運の勃興せんとする時代で、新文明の光の閃きを認める時代である。もっともその新気運というのは幕府それ自身に取っては下り坂に赴くことを意味するのであって、徳川氏のためには不祥なる次第であるけれども、日本全体の文化から見ればまさに一転変を来たそうとする時代であった。」（辻，1980:p.328）と混乱した時代の風潮の中で、新しい時代の胎動が見られた時代であったと評価しているのである。さらに、

田沼時代は「日本最近世史の序幕を成すものである。幕末開港の糸口はこの時代に開かれたのである。明治の文化はこの時代において胚胎したのである。」（辻，1980:p.328）と結んでいる。

本書全体を通して読むと、辻は田沼こそ変化する江戸時代後期にあって、時代の変化にいち早く気づき政策に生かした先駆的な指導者だったと積極的に主張していることがよくわかる。

この辻の本は大正4年（1915）に発行されたものであり、歴史家の間でも高い評価をうけてもいる。したがって、近年の田沼評価は辻のこの本が出发点だとするのが妥当である。

ところが、大石は辻の前半の田沼に対する悪評部分の資料的価値を問題にしたのみで、なぜかここに引用したような後半の田沼とその時代の積極的な評価にはまったくふれていない。自説のオリジナリティを際立たせるため、あえて辻の著書のうち田沼を肯定的に評価した後半を無視したのであろうか。

大石は、文献学者・辻善之助の本丸である引用文書の文献的な弱点を指摘することにより、辻の田沼像を乗り越えて新しい田沼像を確立しようとしたものであろう。

田沼意次の実像

それはともかく、冒頭に紹介した『甲子夜話』に描かれている田沼邸の逸話であるが、こ

れを100%信用して、だから田沼は悪人だというもおかしいが、大石のように史料価値はないとして捨て去ってすむものであろうか。田沼のその他の行動から見て、誇張はあるもののこれは事実の一面を伝えているのではないかと思われる。むしろそこにこそ田沼の政治家としてのリアルな姿が見えるのではないだろうか。この逸話から見える田沼の実像は、上下を問わず多くの人に気さくに会って話を聞く人、つまり民意をくみ取って政策に反映させる政治家であった。いろいろな人の言葉に耳を傾けた結果、世の中の実情や趨勢をよく把握していたのではないかと思われる。

これに対し、田沼を追い落とした松平定信は、8代將軍の孫という毛並みのよさの上に幼い時から並外れた才能を発揮し、学問、文芸、絵画に通じ12歳の時に自戒の書『自教鑑』を書き、17歳までに7,000首の和歌を詠んだという。こういう人は幼少の頃からすさまじい学習を通して教養を身に付け、その価値観で世の中を見る傾向がある。既存の価値観をしっかりと身につけていたのである。従ってその政策はどうしても過去の優れた哲学や政策を基準にして現状を否定的に見ようとする傾向がある。

対するに、田沼は生涯一冊も本を残していない。家柄も低く、たいした教育も受けなかった可能性が高い。学問が無かったとさえ思われる。ということは、彼は、既存の価値観に捕われずに世の中をありのままに見ていた。自然体で世の中に対していたのではないだろうか。時代に対する彼の感覚が優れていたために、新しいアイデアや人物がどんどん取り立てられたのであろう。

それにしても、冒頭の田沼邸の情景は賄賂や汚職の政治家のイメージと結びつきやすい。しかし、同時に時代の変化に気づいた先駆的な政治家でもあったとすれば、いったい、田沼という人物の実像はどこにあるのだろうか。

山師の時代

こうした疑問に答えようとするのが、藤田覚の『田沼意次』（ミネルヴァ書房 2007）である。

藤田はこの時代を利益追求型の政治、そして

山師の時代であると説く。

元禄時代の放漫経営のため幕府財政は破綻したが、吉宗の享保の改革はそれを年貢の増徴や新田開発などの従来型の手法で切り抜けた。しかし、田沼の時代ともなるとそんな手法は限界に達し、百姓一揆などが空前の規模で繰り返されてくる。財政難は深刻化するが、享保の改革以来の政策は出尽くしており、「意次は、元禄、享保という時代とは異なるやり方で、財政問題の解決を求められたのである。17世紀末以降の民間の経済力の充実を前提にして、その資金と知識や技術を幕府の政策に活用しようとし、民間からの興利策の献策を積極的に取り上げて実施」（藤田、2007:p.121）したというのである。幕府の命運を背負い、かつ敏感な田沼は、いち早く環境の変化とこれまでの米本位という常識との矛盾に気づき、次々と斬新な施策を打っていった。

この時代、農村では米以外の生産が増加し、ミソ、醤油、酒、みりん、生糸、木綿、油、ロウソク、製紙など、産業が著しく発達し、その流通網も充実した。これらに従事する職人や商人が増え、その結果、百姓と武士という単純な社会構造から、商工業者が活躍し貨幣経済が大発展する複雑な社会となり、創意工夫と努力だけで事業を大きく展開することができた。こうして彼らはあらゆる可能性を求めて利益追求に走った。

たとえば、白砂糖や朝鮮人参の国産化がある。当時の白砂糖はオランダか中国からの輸入に頼っていたが、池上幸豊は白砂糖の国産化を意次に働きかけた。関八州そのほかへ甘藷砂糖の製法を伝授するため池上が村々を巡回するのも田沼に根回しをして許可を得ている。甘藷砂糖の植え付け場所の下げ渡しも、砂糖の製法を伝授するために農村を巡回することも関係する役所へ口利きをしている。こうした民間の知恵と行政のバックアップで産業が発展し、運上つまり税金も増えていった。

「しかし、あまりにもさまざまに、あるいは細々と利益を追い求めたため、「山師・運上」が跋扈（ばっこ）したと批判されることになった。そのなかで、元禄時代から顕著になっていた幕

府の役所・役人と町人、業者との癒着や不明朗な関係が強まり、いっそう賄賂や汚職が横行することになったのである。」(藤田, 2007:p.121)

このように賄賂や汚職が蔓延した背景を説明し、さらに、

「財政を再建する策として、享保の改革でとられた年貢を増やすやり方は、すでに限界に達していた。そこで、高率の年貢をなるべく維持しつつも、年貢以外から新たな収入を増やすため、さまざまな興利策、すなわち「国益」「御益」策を追求することになったのである。田沼時代という舞台の上で、山師たちの多彩な興利策の劇が上演された。」(藤田, 2007:p.84) と語る。

こうした山師の中の山師が平賀源内であった。

源内は、日本各地に産する草木、鳥獣、魚、昆虫、土石などあらゆる物を集めて展示し「東都薬品会」と称して人々を集めた。輸入に頼らず、国産品を発掘し、国益を増進しようと考えたためだという。

田沼はこうした源内のことを聞くと、さっそくオランダ本草翻訳御用という役を与えて長崎に送った。

源内は長崎から帰ると、次から次へと新奇なものを作り出した。水平線を測る平線儀、石綿を使った火浣布(耐火布)、寒暖計、そして電気を起こすエレキテルなどである。源内のまわりには常に人が集まりサロンを形成していた。源内はさらに文筆においても才能を発揮したが、あまりの多才ぶりに世間は彼を理解することができず、山師扱いられた。

「勘定奉行や勘定奉行所の役人たちも、自身の発案や民間からの献策を受け入れて、「運上」を増やす興利策をつぎつぎと実施していったのだから、間違いなく山師であった。源内のパトロンが意次だったことは有名であり、意次の経済政策を担ったのは勘定奉行所役人たちだったのだから、この人々を「山師」と呼ぶならば、田沼意次こそ山師の親方だったと言える。」(藤田, 2007:p.85)

こうした時代であれば、「山師」たちが田沼の屋敷へ押しかけて、献策したり、許認可を求めたりするのは何の不思議もない。

田沼はこうして時代の風を読み取り、政策に反映させていったのである。

こうした政策のうちで注目すべきものが、「印旛沼の干拓事業」「北海道の開拓とロシアとの交易事業」「両替商役金」などである。

印旛沼の干拓事業は大規模な工事を必要とした。もっとも大きな工事が利根川から流入する水をせき止める大規模なダム建設であった。工事は江戸と大坂の豪商の資金を活用して進められた。しかし、着工後2年目、順調に進んでいた工事に突然江戸を水びたしにする空前の大雨が降り、浅間の噴火による降灰とあいまって大洪水となって襲いかかり、工事中のダムを破壊しきったのである。こうして印旛沼の干拓事業は終了した。

蝦夷地の開拓事業については、前項の工藤平助のところで紹介したとおりである。これも本格的に着手しようとした矢先に田沼が失脚してしまった。

こうして見てくると、江戸時代260年の中で、田沼時代の特色がよく見えてくる。つまり、田沼時代は江戸時代の大きな転換期であり、組織としてみれば、破綻と再生の力が顕在化し、大きなうねりとなって激突した時代であった。その中で側用人兼老中という政権の頂点に登りつめた田沼意次は、繊細な感受性で環境の変化を感じ取り、大胆に政策転換をはたそうと試みたのであった。しかし、譜代勢力を中心とする旧勢力の結束と突然の天災にはばまれて、あえなく挫折したのである。

3.3 蘭学者たち

『解体新書』

日本は国土の面積に比して非常に長い海岸線を持つ、世界にも希に見る海洋国家である。有史以前から国の境を意識することなく、海を介して周辺の国々と自由に往来することが当然であった。

16世紀も後半になると船は大型化し、マカオ、ルソン、マニラなど、アジア各地に交易の拠点を築いて組織的な貿易が行われていた。特にタイのアユタヤには大規模な日本人町ができた。ポルトガルを始めとするヨーロッパ諸国からの

来航も次第に増加していった。

しかし、キリスト教の急速な浸透に危機感を募らせた徳川幕府はオランダ以外のヨーロッパ船の来航を禁じ、ついにオランダ人さえ長崎出島に閉じこめてしまう。これ以降、日本は長大な海岸線を封鎖し、閉じこもってしまった。鎖国である。世界の情報は長崎の小さな窓を通してしか入ってこない。しかもその情報は幕府に独占され他に漏らすことは禁じられていた。しかし、まるで、小さな割れ目から水が染みとおるように、じわじわと海外の情報が民間にもれてくる。出島の商館長カピタンが持ち込む高価な本が引っ張りだこで買い取られる。真っ先に手を出したのが医者だ。死亡率の高かった江戸時代、医師は長崎からもたらされる西洋医学の情報に目を見開き、医学書を競って求めたのである。その医学書には、骨格、内臓、血管などがきわめて精密に描写されており、それだけでも驚嘆に値するものであったが、従来、医師の間に信じられてきた漢方の医書とはまったく異なる世界がそこには展開していた。

どちらが正しいのか、西洋人と東洋人とは体の構造が違うのか、など疑問はふくらんでいった。

医師たちの間に、人体の内側を見てみたい。こうした欲求がつのっていた。

明和8年(1771)3月4日、杉田玄白は浅草三谷の茶屋で前野良沢、中川淳庵らと待ち合わせ、連れ立って千住小塚原へと向かった。この時良沢は懐から一冊のオランダ医学書を取りだしてみせた。それははからずも玄白が持参したものと同一本であった。蘭書を手に入ること自体きわめて困難な時代であったから、この偶然の一致に一同手を叩いて感激したという。これが一般に『ターヘルアナトミア』と呼ばれた解剖学の本であった。

小塚原は江戸の刑場の一つであるが、玄白は、ここで今日、腑分けが行われるので、よかったらご覧なさい、と町奉行から手紙をもらっていたのである。腑分けをされるのは青茶婆(あおちゃば)と呼ばれた刑死者、執刀は90歳になる当時は穢多(えた)と呼ばれたベテランの解体職人であった。

馴れた手つきで腹を割き、内臓を一つずつ取りだして見せる。はじめて体内を見る玄白たちは、目を見張ったが、なりよりそれがオランダ医学書の図解と正確に符合していることに感嘆した。

腑分けが終り、刑場内にちらばっている骨をひろってみると、これもオランダ医学書の図と一致している。

感動した一同は、なんとかしてこのオランダ医学書を翻訳しようと約束し、翌日からさっそくその作業にとりかかった。

しかし、始めてみるとその作業は、とてつもなく大変なものであった。この時の気持を玄白は後年次のように書いている。

「まったく、艫(ろ)も舵もない船が、大海原に乗り出したようで、ただただひろびろと果てしなくひろく、寄りつくところとてなく、ただもう、あきれにあきれのばかりであった。」(杉田玄白、片桐一男訳『蘭学事始』(2000)講談社学術文庫)

しかし、まゆげ、鼻など疑問の余地のない部位の説明を読み解くことから徐々に解説を進め、昼となく夜となくはげんだ結果、3年半の後にはついに全体の翻訳に成功した。

次の大問題はこの本をできるだけ速やかに広く世の人に広めたいということであったが、はたして、幕府がそれを認めてくれるか否か、皆目見当がつかなかった。

玄白らにとって幸いだったのは、この時がちょうど田沼意次が老中になって2年目という田沼時代の最盛期だったことである。慎重な根回しも功を奏して、何のおとがめもなく『解体新書』(1774年)として出版することができた。

これは日本の近代医学さらには近代科学にとって画期的な出来事であった。

実はこのころ腑分けは各地で行われ、見学した医師も少なくなかった。しかし、見学して衝撃をうけ、ただちに蘭書の翻訳にとりかかり、ついに出版までこぎつけたのは玄白たちの他にはいなかった。

ここで、何よりも大切なことは、人体の内側を実際に観察し、蘭書の絵が正しく漢書が間違っていることを確認するという、事実にもとづ

いて判断した行為である。そして、その驚きが蘭書の翻訳出版につながったところにこの日の出来事の画期的な意味があったといえよう。

『解体新書』の翻訳出版はそれまで漢書や和書から学んでいた人々に衝撃を与えた。正に「蘭学事始」で、これをきっかけに蘭学がとくに知識人の間にじわじわと浸透していくのである。

オランダ正月

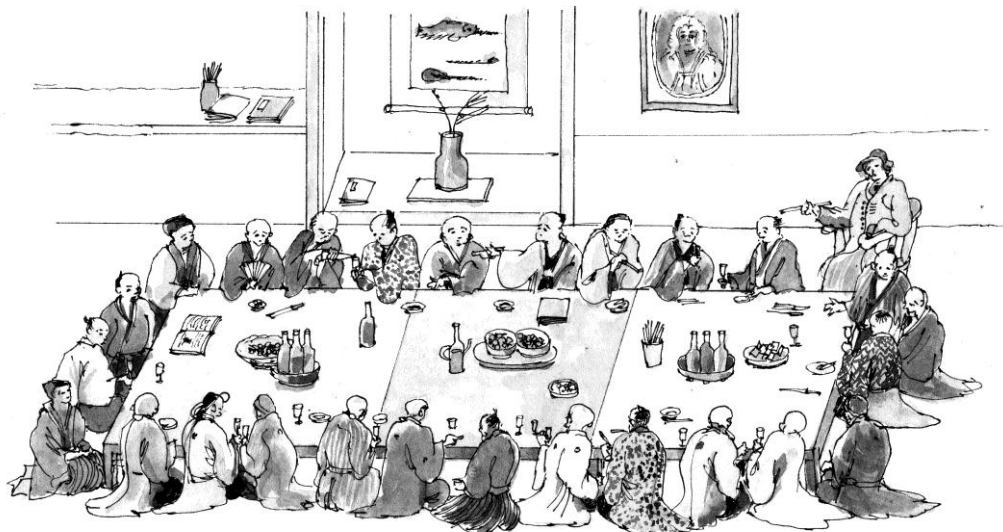
ここに一枚の絵が残されている。大きなテーブルを囲んで大勢の男たちが座っている。男達の前には酒ビンとワイングラス、ささやかな酒肴、ナイフとフォークが置かれている。しかも、男の1人は西洋人の船乗りのような服を着て椅子に座っている。江戸時代の宴会なら1人ずつ膳が並ぶのが普通で、こんな大テーブルを囲む姿は見たことがない。きわめて奇妙な図柄だ。

実はこの絵、寛政6年(1795)1月1日、京橋水谷町の大槻玄沢が自分の家塾、芝蘭堂(しらんどう)に江戸の蘭学者28人を集めて、太陽暦の正月を祝ったときの様子を描いたものだ。ここには前野良沢、桂川甫周、司馬江漢、さらに

先年ロシアから帰国した大黒屋光太夫も参加していたと考えられている。

さらにこの絵をよく見ると、正面の壁にひげ面の西洋人の肖像画が掛けてある。この人物は古代ギリシャの医師、ヒポクラテスである。ヒポクラテスは患者の立場に立った医療を実践した医師として、ヨーロッパでは「医師の父」として尊敬されているのだが、驚くべきことに、この頃の江戸の医師たちにも「医聖」として崇拜されていたのである。ここで交わされていた会話の内容は分からないが、しかし、この絵からは穏やかな会話を楽しむ雰囲気を読み取ることができる。ここは江戸時代の蘭学者のサロンだったのだ。

彼らはこの集まりを新元会となづけ、これ以降毎年開催し、44年間も続いた。始まったのは、寛政の改革が終了した翌年(1794)、終わったのは天保の改革が始まるころ(1838年)である。この間がまさしく文化・文政時代とびったりと一致するのは偶然とはいえない。こんな事が許された時代こそ文化・文政時代だったのである。



オランダ正月の図(早稲田大学図書館蔵「芝蘭堂新元会図」を参考に描いた)

この会合は一般にはオランダ正月と呼ばれていた。もともと出島のオランダ人たちがクリスマスを祝う行事として行なっていたものだが、キリスト教が厳禁されていたため、正月を祝う行事として偽装されたものであった。

儒教の思想倫理で厳格に縛られていたこの時代に、江戸の真ん中でこのような行事が公然と44年間も行なわれていたとは、奇跡的なことと言わざるを得ない。

蘭学は『解体新書』の発行をきっかけとして、急速に広がりを見せた。その中から内科書や眼科書の翻訳、オランダ語の入門書、辞書などが次々に発行され、ますます普及に弾みがついた。蘭学者は当初は、もっとも切実な医師が中心であったが、次第に薬草研究から本草学、博物学、さらには天文学、暦学、地理学へと関心領域を広げていった。しかし、あくまでも自然科学系であり、キリスト教に関するものは厳禁であったから、関係する宗教、政治、文学などには手を出すことはできなかった。

こうして、蘭学は文化文政期の爆発的な隆盛期を迎えるのであった。それを象徴するのが、芝蘭堂で行なわれていたオランダ正月だったのである。

シーボルトの来日

ドイツ人の医師シーボルトがオランダ軍医として長崎出島に上陸したとき彼は大きな野心を胸に秘めていた。彼は、最後の閉ざされた秘境日本に潜入し、その動植物、鉱物、地理など総合的に研究し、ヨーロッパの学会で発表したいと考えていた。

また、オランダもシーボルトに期待を寄せて、日本に送り込んだのだが、その目的は衰退した対日貿易をもういちど立て直したいということであった。オランダはすでに200年にわたって対日貿易を独占してきたが、次第に海上の優位をイギリスに奪われたばかりでなく、ナポレオンによって国を奪われ、近年やっと独立を回復したばかりだったのである。

シーボルトと同様の意図をもって来日した西洋人としては、すでにケンペルとツェンベルクの二人の先人がいた。ケンペルは元禄時代、ツ

ェンベルクは田沼時代である。ともに帰国後、日本研究を発表し、ヨーロッパでは日本研究の定本として高く評価されていた。しかし、シーボルトは彼らをうらまわす業績をあげようと野心をたぎらせていた。そしてそれは事実、そのとおり実現した。シーボルトが先人たちをはるかに超える業績をあげることができたのには理由があった。先人たちの滞在期間がともに2年間だったのに対し、シーボルトの滞在は6年半に及んだうえ、情報収集の方法がまったく異なっていたのである。

シーボルトは当初は出島で日本人の患者の診察を行っていたが、やがて長崎郊外の鳴滝に土地を得て、私塾を開くことができた。そこには3棟の家を建てただけでなく、その間に植物園を開くことが出来た。

シーボルトはここで診察と同時に講義を行ったのだが、この塾を目指して全国から受講希望者がやってきた。塾生は常時50名から60名おり、通算では150名を超えたという。シーボルトはこの学生たちにレポートの提出を課した。しかも塾生がやめて国に帰ったあとも課題を与え、そのレポートの提出を求めた。これこそシーボルトが日本の情報を集めるきわめて有効な手段であった。その課題は植物を中心としながらも、きわめて多岐にわたっており、「日本の神話」「製塩法」「日本の蜘蛛類」「捕鯨」「宝石」「生け花」など一見支離滅裂であるが、これこそ日本の総合的研究をめざした彼の目的であった。

こうしてシーボルトは長崎にいながらしにしてきわめて効率よく日本各地の植物の他、地理、風俗、生活習慣まで調べあげることができた。

なぜこんなことができたのであろうか。

じつはシーボルトが来日した時期が重要であった。江戸時代の文化が成熟した文化・文政時代の後期、この頃までに日本では前項でみたオランダ正月のように蘭学がかなり普及しており、シーボルトの鳴滝塾ではオランダ語で講義が行われたほか、課題に対して塾生たちはオランダ語でレポートを書くことができたのである。つまり、ケンペルやツェンベルクの時代と違って、シーボルトが来日した時には日本側に彼を受け入れる体勢が十分にできていたのである。シー

ボルトの上陸に際して、彼のオランダ語が怪しいと疑われて、あやうく〈高地オランダ〉の出身だと言い逃れて冷や汗をかいたと伝えられているが、日本側のオランダ語の理解力がそこまで進んでいたのである。シーボルトはオランダ語にこれほど習熟した塾生たちを協力者としてフルに活用したのである。

彼は、レポートのみならず、塾生を使って植物の種や標本をはじめ各種の標本を集めた。

また、患者から報酬を受け取らなかったため、お礼として珍しい文物が次々ともたらされ、それらを収納するために出島の家を増築しなければならないほどであった。

帰国直前に伊能忠敬の日本地図を持ち出そうとしたかどで、いわゆるシーボルト事件を起こし、地図は没収されてしまったが、そのほかは特に怪しまれることもなく膨大なコレクションを持ち出すことができたという。

シーボルトが日本から持ち出した生物学的標本を、帰国の途次、バダヴィア（インドネシア）で総督に披露したが、そこには哺乳類200、鳥類900、魚類750、爬虫類170、無脊椎動物5,000以上、さらに植物2,000、植物標本12,000が含まれていた。

こうした膨大な研究成果は帰国後次々に発表されて、ヨーロッパの人々を驚かすことになるのだが、それは、日本の蘭学者たちの協力なくしては実現しなかったのではないか。

蘭学者たちはシーボルトから最新の医学知識のほか、世界の知識を吸収、深化させたことはいうまでもない。彼らによって西洋の科学技術書が訳され、幕末の急速な近代化の基礎が築かれた。蘭学の普及なしには幕末明治の急速な近代化はあり得なかったといえよう。

江戸時代が主体的にかかわった環境は、きわめて閉鎖的だが、穏やかな安定したものであった。それは、それまでの長い戦乱の世と決別するため、あえて鎖国と世襲制を常識とした必然の帰結なのである。しかし、環境は変わっていく。

とはいえ、江戸時代の前半期はまだその変質そして常識との矛盾は気づかれていなかった。

むしろこの間、江戸時代は成長過程にあり、人々はあでやかな元禄文化を开花させたりもしている。もっとも、この間、世界とくに西欧では新教国イギリスの台頭があった。しかし、この変化に気づき、あまつさえその意義などを理解した人はほとんどいなかった。我が国への国際情報の唯一の提供者オランダが情報に脚色をほどこしたり、そうした情報を適切に読み解く意志や力が我が国に乏しかったからである。これには一理ある。組織が成長しているときは、人々はそれをもたらしめている常識を信頼しており、それに対応する環境が変化しつつあるのでは、となかなか疑わないものである。

だが、江戸時代の後期になると、環境の変質そして常識との矛盾が次第に露わになってきた。まず、産業革命の成功をバックにした大英帝国がインド、中国と次々と植民地を広げ、わが国をも脅かす勢いであった。一方、ロシアは我が国北方領域をしばしば襲っており、幕府はそれを無視することもできず、何らかの対策を講じなければならなくなっていた。穏やかであるはずの環境のこうした変化に不安を感じたのが林子平であり工藤平助で、ともに「海防が必要」という互解を広めようとしたのである。

江戸時代も元禄のころから徐々に幕府財政が傾いていった。8代将軍吉宗による享保の改革はこの傾向に歯止めをかけた。しかしそれとても一時的なものにすぎず、なおも幕府財政は悪化の一途をたどっていった。

こうした状況に危機を感じたのが時の老中田沼意次であった。そのころの経済は米本位というよりも徐々に発展する商工業に重点が移り始めていた。環境が変化しつつあったのである。リアリスト田沼は、こうした変化を素早く感じ取った。そして、彼は、幕府財政を年貢米に頼るばかりでなく、各地の物産の掘り起こしや豪商からの運上金の取り立てなどを試み、実行した。

田沼のこうした施策のみならず学問や芸術活動への側面的援助は江戸時代の常識に対する互解の実施であり、奨励なのである。

こうした田沼の反封建的すなわち開放的で躍動する時代気分の中で花開いたのが蘭学であっ

た。蘭方医をさきがけとする学者たちは、自らの知的好奇心の赴くままに、医学、博物学、それに天文学などに思考の翼を広げた。彼らのこのような活動は、儒教をベースとする江戸時代の常識に対する互解を豊かにしていったのである。

これまで、江戸時代の後期になって次第に顕在化していく環境変化が幕閣や知識人それに市井の敏感な人たちによって気づかれ、互解が形成され、流布される様子を見てきた。田沼の時代から文化・文政時代にかけてこうしたことが、そこここで展開され、さまざまな互解が既存の常識を徐々に揺るがし、ついには幕末・維新の動乱にいたるのである。

(イラスト 坂田 融)

〔参考文献〕

- 浅田 実 (1989) 『東インド会社』 講談社現代新書
大石慎三郎 (1991) 『田沼意次の時代』 岩波書店、
(2001) 岩波現代文庫
大場秀章 (2001) 『花の男シーボルト』 文春新書
小川鼎三 (1968) 『解体新書』 中公新書
片桐一男 (2000) 『江戸のオランダ人』 中公新書
北島正元 (1966) 『幕藩制の苦悶』 日本の歴史18中央
公論社
杉田玄白、片桐一男訳 (2000) 『蘭学事始』 講談社学
術文庫
竹内 誠 (1989) 『江戸と大坂』 大系日本の歴史10小
学館
辻善之助 (1915) 『田沼時代』, (1980) 岩波文庫
中西 啓 (1975) 『長崎のオランダ医たち』 岩波新書
奈良本辰也 (1966) 『町人の実力』 日本の歴史17中央
公論社
藤田 覚 (2007) 『田沼意次』 ミネルヴァ書房